OKINAWA 10 YEARS

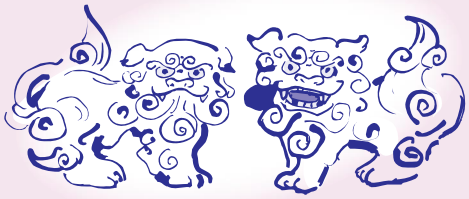
エプロン通信員　備瀬真理

皆様、お元気ですか。新年が明けて1ヶ月。日本全国、極寒の季節。沖縄も雨の度に寒くなる季節ですね。こんなに寒いのなら雪が降ればいいのに・・・と思うのは私と子どもだけでしょうか（博多から来た私は毎年、雪が恋しくなる）。「寒さ感じる？」「こたつはある？」と未だにこんな質問されますが、クマじゃないので勿論、「寒い」です。「昔はもっと寒かったんだよー。」とか聞くけど、1月にはしっかり桜が咲いていたんでしょう？やっぱり南国です。そんな南国沖縄に来て今年で10年目に突入しました。ドンドンパフパフ🎉それを祝してか今年、生まれて初めて元旦に行った初詣で、生まれて初めておみくじで「大吉」を引き当てました（普天満宮さんありがとう）。しかも卯年の私、いつも以上に飛び跳ねていくので注意してください。

メデタイので前置きが長くなりましたが今回は誰の許可も得ず勝手に沖縄10年生活を振り返らせて頂きます。

10年前、右も左も分からない私は、まず夏の暑さにマイりました。皆、何を食べているのか、どんな気持ちで生活すればこの暑さの中歩けるのか、いつも不思議でたまりませんでした。

電車、バス、徒歩、自転車の生活を送っていた私が子供が生まれてから自動車免許を取得する、という今思えば無謀な試練を乗り越えなければなりませんでした。運転適性診断では「運転しないで下さい。」の結果通り、何度も諦めようとしました。が、託児所のおばちゃんに励まされ、色んな人の思いを無駄にできない、と必死でした。個性的な教官方が沖縄に関する知識をしっかりたたき込んでくれました。「車の運転より50ＣＣバイクの運転の方が上手だね。」とも褒められました。ある教官が私に残してくれた言葉「あんまり考えすぎると病気するよ。」その時から私の沖縄ライフが少しずつ変わり始めたのでした。



あれから10年。何度も帰ろうとも思った私をつなぎ止めた「何か」が沖縄（ここ）にはある。それを宜野湾（ここ）で探し続けたい。

茶（ちゃー）ぐわーゆんたく 82

ぎのわんの二つのレール

まだまだ寒いこの季節は、沖縄の風物詩であるサトウキビの収穫時期でもあります。市内でサトウキビ畑を見かけることは少なくなりましたが、戦前の宜野湾村はサトウキビ栽培を中心とした農村地域で、サトウキビの収穫とサーターヤー（砂糖小屋）での製糖作業は冬の風景でした。

宜野湾村では、サーターヤーでの自家製糖のほかに、嘉手納の製糖工場を利用する農家もいました。製糖工場までサトウキビを運ぶには、那覇―嘉手納間を走っていた軽便鉄道を利用しました。村内には大謝名駅・真志喜駅・大山駅があり、なかでも大山駅は乗客・貨物ともに多く、普天満宮まで客馬車が往来し、サトウキビの出荷も大山駅で行いました。

大山駅の集積所にサトウキビを運ぶための、トゥルックミチなどと呼ばれるトロッコのレールが、村内には佐真下や新城、普天間などに敷かれていました。農家はサトウキビを担いだり、荷馬車に積んで近くのトゥルックミチまで運び、トゥルムチャー（トロッコ持ち）と呼ばれる人夫に大山駅までの運搬を頼みました。トゥルムチャーはトロッコを馬に引かせて大山駅まで向かいますが、サトウキビを積みすぎて、喜友名の難所で横転することもありました。子どもたちがトロッコに乗り込み、坂道を下って遊ぶこともありました。

宜野湾村の産業を支えた二つのレールは、沖縄戦で破壊され失われてしまいました。しかし、車両の一部は市立博物館に展示され、その歴史を今に伝えています。

（文責　金城　良三）

▲軽便鉄道の一部（市立博物館）

▲1938（昭和13）年頃の普天満宮前、左下のレールがトゥルックミチ

『宜野湾市史』へのお問い合わせ
教育委員会 文化課 ☎893-4430